

# Open Space

## 2016: オープン・スペース 2016 メディア・コンシャス

# Media Conscious

「オープン・スペース 2016 メディア・コンシャス」展は、メディア・アート作品をはじめ、現代のメディア環境における多様な表現をとりあげ、幅広い観客層に向けて紹介する展覧会です。

赤松音呂  
岩井俊雄  
エキソニモ  
クリスタ・ソムラー & ロラン・ミニョノー  
谷口暁彦  
津田道子  
グレゴリー・バーサミアン  
藤井直敬 + GRINDER-MAN + evala  
藤本由紀夫  
堀尾寛太

Goh UOZUMI (5/28-9/25)  
「アジアのメディア・コンシャス」(11/1-3/12)

明治大学 渡邊恵太研究室

### 開催概要

会期 = 2016年5月28日(土) - 2017年3月12日(日)  
会場 = NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]  
開館時間 = 午前11時 - 午後6時  
休館日 = 月曜日(月曜が祝日の場合翌日)、年末年始(12/29-1/4)、保守点検日(8/7, 2/12)  
入場無料  
主催 = NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]  
※諸事情により開館時間の変更および休館の可能性がございます。  
最新情報はホームページなどでお知らせいたします。

NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]

住所: 〒163-1404 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー4階  
京王新線初台駅東口から徒歩2分  
お問い合わせ: ☎0120-144199  
E-mail: [query@ntticc.or.jp](mailto:query@ntticc.or.jp) URL: <http://www.ntticc.or.jp/>

「オープン・スペース 2016 メディア・コンシャス」展は、メディア・アート作品をはじめ、現代のメディア環境における多様な表現をとりあげ、幅広い観客層に向けて紹介する展覧会です。メディア・アートにおける代表的な作品、先端技術を取り入れた作品、批評的な観点を持つ作品、さらに研究機関で進行中のプロジェクトなどを、作品の理解を助ける解説とともに展示し、作品を楽しむだけでなく、その背景にある現代の多様化したメディアやコミュニケーションの在り方について考えるきっかけとなることをめざしています。11回目となる今年度のオープン・スペースは、「メディア・コンシャス」をテーマとし、メディアに意識的に対することで新たな価値を見出していくという、メディア・アートの持つ性質に焦点をあてた展示となります。

会期中には、アーティストや有識者を招いたトーク、レクチャー、シンポジウム、ワークショップ、学芸スタッフによる作品解説ツアーを開催するなど、さまざまなプログラムを用意しています。

オープン・スペースとは、2006年に開始した、ギャラリーでの年度ごとに展示内容を変える展覧会、ミニシアター、映像アーカイブ「HIVE」などを、入場無料で公開するものです。ICCの活動理念にもとづき、より多くの方々に先進的な技術を用いた芸術表現とコミュニケーション文化の可能性を提示する開かれた場として機能することをめざしています。

### 赤松音呂《チジキンツ》2013-15年

展示室に設えた数百のガラスの水に浮かんでいる縫い針が、地磁気的作用によって北を向いています。ときおりガラスにあたり繊細な音を発します。「チジキンツ」とは、「地磁気」と日本庭園に設置される「水琴窟」を合わせた造語です。主に茶室の前に設置される水琴窟の音が、現実世界から茶室という異空間へと意識を変えるきっかけとなるように、《チジキンツ》は、人間が感じることのできない地磁気的作用を音として知覚化し、日常空間に重ね合わせるサウンド・インスタレーションです。



赤松音呂《チジキンツ》2013-15年

岩井俊雄《マシュマロスコープ》2002年  
マシュマロのような形をしたオブジェの中を覗き込むと、まわりの風景や人が、まるで時間が行きつ戻りつするように変化したりして映っています。ビデオカメラでとらえた映像をコンピュータに蓄え、映像を再生する順番や長さを変化させることで、時間が変化しているように見えます。(2006-15年度オープン・スペース展示作品/継続)



岩井俊雄  
《マシュマロスコープ》  
2002年  
撮影:木奥恵三

### 岩井俊雄《マシュマロモニター》2002年

マシュマロのような形をしたオブジェの中を覗き込むと、映っている映像がリアルタイムにゆがんだり伸びたり縮んだりします。ビデオカメラでとらえた映像をコンピュータに蓄え、画面ごと、あるいは部分的に映像を表示する時間を変化させることで、空間の様子を変化させています。(2015年度オープン・スペース展示作品/継続)



岩井俊雄  
《マシュマロモニター》  
2002年  
撮影:木奥恵三

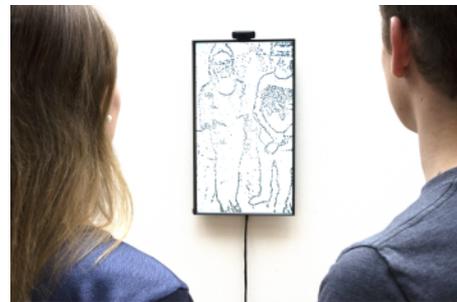
### エキソニモ 新作

現代における身体の境界線を問う作品《Body paint》(2014-)シリーズの新作を発表します。モニターに映された物体の映像の輪郭をふちどるように、映像の部分以外を絵具で塗り込められたディスプレイは、映像の解像度と相まって、生々しいレリーフのような2.5次元の映像として浮かび上がります。映像としてのモノのイメージと伝統的な意味での絵画というメディアと情報機器とが混在した、新たな表象を作り出し、メディアの問題を意識させる作品です。



エキソニモ《Body Paint  
- 40inch/Male/White》  
2014年(参考図版)

クリスタ・ソムラー & ロラン・ミニョノー  
《ポートレイト・オン・ザ・フライ》2015年  
モニターの前に立つと、画面の中の数千匹のハエの群れが観客の顔の特徴を検出し、肖像画を形作ります。観客が少しでも動くとハエが飛び去ってしまうため、顔のように見えていた状態は定着することなく、ポーズをつけようとしたそばから霧散してしまいます。現在の自撮り文化のはかなさ、また、現代のデジタル・メディアの移り変わりの早さや脆弱性に言及した作品です。



クリスタ・ソムラー & ロラン・ミニョノー  
《ポートレイト・オン・ザ・フライ—インタラクティブ》2015年

### 谷口暁彦

#### 《私のようなもの／見ることについて》(新作)

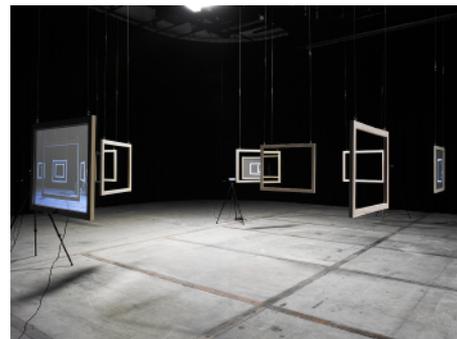
作家自身の姿を3Dスキャンして作られたアヴァターが、同じく作家の身近にあるものの3Dスキャンデータから作成されたオブジェクトが散りばめられた仮想3D空間内を動きながら、「見る」ということについてのテキストをたどっていく映像インスタレーションです。アヴァターの一部は鑑賞者によって操作することができます。



谷口暁彦《私のようなもの／見ることについて》2016年

### 津田道子 新作

鏡やスクリーン、または空の枠と、ビデオカメラ、プロジェクターによる映像インスタレーションです。観客が各要素の配置された空間内を移動すると、鏡に映った鏡像、ビデオカメラを通してスクリーンに投影された映像、また空の枠による実際の像、さらにそれらの組み合わせによる像など、思わぬかたちで自分または他の観客の姿を発見して、「いま・ここ」という感覚を問い直す体験をします。



津田道子《Observer = f(f(r, f(d, G)), f(r, Observer, f(d, f(t, null), f(t, f(r, f(t, cameraE))), f(d, f(t, Observer, f(r, null))))))》2012年  
撮影:山本紉 © Michiko Tsuda Courtesy of TARO NASU (参考図版)

グレゴリー・バーサミアン《ジャグラー》1997年  
 アニメーションなど映像装置の原型ともいえる原理  
 を応用した、ストロボの光を利用した立体的アニメ  
 ションです。受話器を手にした人体がそれを中空に  
 投げ上げると、放り上げられた受話器は哺乳壺、サイ  
 コロなどへと形態を変容させながら再び人体の手  
 へと戻ってきます。残像の原理を利用して、人間と機  
 械の間にある希望と葛藤を表現した作品です。  
 (ICCコレクション作品)



グレゴリー・バーサミアン  
 《ジャグラー》1997年  
 撮影:大高隆

藤井直敬+GRINDER-MAN+evala  
 《The Mirror》2015年

鏡をモチーフにした没入体験型作品《The Mirror》  
 は、自己と身体とのつながりをテーマにした展示作品で  
 す。ヘッドマウントディスプレイとヘッドフォンを装着し  
 た1名の体験者は、「こころ」と「からだ」が乖離する約  
 8分間を体験します。本作の基幹技術であるSRシステ  
 ム(Substitutional Reality System:代替現実システム)  
 は、理化学研究所脳科学総合研究センター適応知性  
 研究チームにより開発されました。従来のVRやARの  
 「仮想を現実近づける」志向とは異なり、過去を現  
 在と地続きのものとして挿入することで、体験者の経  
 験する主観的な「現実」そのものに影響を与えます。



藤井直敬+GRINDER-MAN+evala 《The Mirror》2015年  
 Photo: Koki Nagahama © Getty Images

藤本由紀夫「ランデヴー」

藤本由紀夫は、「聴く」ことを創造的な行為として作品  
 にするアーティストです。音を発見し、それによって驚  
 きや楽しさを与える作品は、世界で評価されていま  
 す。そこには音を発するメディア、音が記録されるメ  
 ディア、といったメディアへの関心が強くあり、メ  
 ディアへの深い洞察があります。藤本の、これまでに制作  
 された、音に限らないさまざまなメディア・テクノ  
 ロジーをモチーフにした作品を網羅したミニチュア個展  
 をラウンジで展開します。



Normal Brain《Lady Maid》1981年

藤本由紀夫《still life》(新作)

無響室の中に、日常的な空間を作り、そこでほんの  
 少し時間を過ごしてみる。藤本の作品《屋上の耳》と  
 いう作品は、「耳がいつもとちがう形になったら世界  
 はどう聴こえるか」というアイデアによって制作され  
 ていますが、同じように日常空間が音の響かない状  
 態になったら、私たちはどのように感じるでしょうか。



無響室 撮影:木奥恵三(参考図版)

堀尾寛太 新作

堀尾寛太は、音、光、運動、位置などさまざまなエネ  
 ルギーを相互に変換する装置を用いたライブ・パフォー  
 マンスや展示を国内外で発表するアーティストです。  
 電気が回路を通じてある物体を動かし、振動に連動  
 する光や磁力を使って連鎖反応を起こし、それらが連  
 結されて、日用品などの物体が、どこか不可思議な挙  
 動を作り出します。それらは因果関係によって連結さ  
 れているにもかかわらず、予測不可能なふるまいを  
 続けます。電気という力を原動力として、みえない要  
 素を取り込みながら動き続けるインスタレーションを  
 制作します。



堀尾寛太《電気と光の紐付け》2014年 撮影:小山田邦哉  
 写真提供:国際芸術センター青森 [ACAC] (参考図版)

連携プロジェクト

ICCと他の外部機関、施設との連携によって、国際的  
 なメディア・アートを介した文化交流を推進するため  
 のプロジェクトです。今年度は、フランスのメディア・  
 アートの国際賞である、デジタル・ショック賞受賞作  
 品、およびアジアのメディア・アートをフィーチャーした  
 展示を行います。

Goh UOZUMI

《暗号通貨のオーディオビジュアル》(仮題/  
 新作)《空の国家—State of Empty》(新作)  
 展示期間:2016年5月28日(土)—9月25日(日)  
 \*展示期間中に展示替えを行いません。  
 ビットコインなどの暗号通貨で実現された  
 「Trustless」というコンセプトに基づく作品を展示しま  
 す。暗号通貨には中央管理機関が存在せず、その信用  
 は分散的ネットワークの各参加者の関与によって  
 形成されています。ビットコインは、このような非中央

集権的な社会インフラが実際に稼働した初めての例  
 です。展示期間の前半は、暗号通貨を可視化するイ  
 ンスタレーションを展示します。後半では、暗号通貨  
 の仕組みに人工知能の機械学習を組み合わせて、  
 仮想国家のシミュレーションを試みます。  
 UOZUMIは、「Trustless」にまつわる作品で、2015年  
 にメディア・アートの国際賞であるデジタル・ショック  
 賞を受賞、フランス、マルセイユで2ヶ月間滞在制作  
 を行ないました。(協力:アンスティチュ・フランス東京)



Goh UOZUMI《仮想通貨を可視化するオーディオビジュアルの新作》  
 (参考図版)

「アジアのメディア・コンシャス」

展示期間:2016年11月1日(火)—2017年3月12日(日)  
 国際交流基金アジアセンターとICCの連携企画とし  
 て、日本とアジア諸国の現代の芸術表現におけるメ  
 ディア・テクノロジーの役割、活用法などをテーマと  
 し、インドネシアのアーティストの活動を紹介すると  
 もに、展示とシンポジウムを行ないます。

研究開発コーナー

大学などの研究機関における研究成果や事例を紹  
 介するコーナーです。技術者や教育現場から発想さ  
 れる未来像を提示するとともに、最先端技術の共同  
 研究の場としても展開していきます。会期中に展示替  
 えを行なう予定です。

明治大学 渡邊恵太研究室

「Dissolving: 身体、道具、環境に融ける  
 インタクションの発想法」

渡邊研究室は「インタクション」を中心のキーワ  
 ードとして、画面に留まらない次のインターネット体験  
 の研究、自己帰属感の高い道具/身体・知覚拡張  
 研究、「すぐ」をテーマにした即応的な創造ツール・  
 環境の研究を行なっています。デジタル・テクノ  
 ロジーが身体、道具、環境に融けるインタクションの  
 発想法を、デモ展示を通じて紹介します。



尾高陽太、渡邊恵太《Integlass: 情報を「得ること」と「利用すること」  
 が一体化した計量カップ》2015年

## 新進アーティスト紹介コーナー「エマージェンシーズ！」

emergencies!

「エマージェンシーズ！」は、今後期待される新進アーティストやクリエイターの最新の作品やプロジェクトなどを紹介するコーナーです。(年間3回展示予定)

エマージェンシーズ! 028

久保ガエタン

「破壊始建設／Research & Destroy」

展示期間：2016年5月28日(土)ー8月6日(土)

久保ガエタンの制作は、まず題材への入念な調査から始まります。そして、調査の過程で見出されたさまざまな事実を別の事柄と結びつけ、ときには自分の個人史も絡めながら、わたしたちの日常に潜む歪みを作品として表現します。本展示では、調査から作品化を経てその解体へと至る彼の制作活動のプロセスを展示タイトルとし、新作を含む複数作品で展開します。



《電力発電》2016年(参考図版)

エマージェンシーズ! 029

青柳菜摘

展示期間：2016年9月13日(火)ー11月20日(日)

エマージェンシーズ! 030

市原えつこ

展示期間：2016年12月20日(火)ー2017年3月12日(日)

## 関連イベント

2015年5月28日(土)、29日(日)には、作家によるイベントの開催を予定しています。

### ●ギャラリートツアー

ICC学芸スタッフが展示作品について解説します。会期中の毎月第三日曜日に開催を予定しています。

定員：各回20名(事前予約不要)

\*関連イベントについて、詳しくはホームページなどで最新の情報をお知らせいたします。

## 広報に関するお問い合わせ

NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]

広報担当：赤坂恵美子

TEL: 03-5353-0800 FAX: 03-5353-0900

E-mail: query@ntticc.or.jp URL: http://www.ntticc.or.jp/

NTTインターコミュニケーション・センター [ICC] は、日本の電話事業100周年(1990年)の記念事業として1997年4月19日、東京/西新宿・東京オペラシティタワーにオープンした文化施設です。ICCは「コミュニケーション」というテーマを軸に科学技術と芸術文化の対話を促進し、豊かな未来社会を構想していきます。

## HIVE

ICCの映像アーカイヴ「HIVE」(ハイヴ)では、ICCの所蔵するビデオ・アート作品、アーティスト、科学者、批評家などのインタビュー映像、1997年の開館以後開催されてきたICCの数多くの活動の映像記録をデジタル化し、コンピュータ端末から視聴することができます。また、上記のコンテンツのうち一部はHIVEのウェブサイト(<http://hive.ntticc.or.jp/>)からも視聴可能です。ウェブ版の映像には原則としてクリエイティブ・コモンズ・ライセンスが付与され、非営利目的での創造的利用を可能にすることで、文化資源としてのICCの活動記録をよりオープンなかたちで社会に開示することをめざしています。

## 2016年度年間スケジュール

### 長期展示

「オープン・スペース 2016 メディア・コンシャス」展

会期：2016年5月28日(土)ー2017年3月12日(日)

### ICCキッズ・プログラム 2016(仮称)

会期：2016年7月16日(土)ー8月31日(水)(予定)

### 企画展

「ART+COM／ライゾマティクス」展(仮称)

会期：2016年12月17日(土)ー2017年3月12日(日)(予定)

\*展覧会名、会期などは2016年4月28日現在の情報です。

詳細は以下までお問い合わせください。

\*各展覧会における関連イベントなど詳細は、それぞれの展覧会ごとに発行するプレスリリースにてお知らせいたします。



INTERCOMMUNICATION CENTER